



勇士
烈婦

奇傳新話

貳

^ 13
3238
1



へ 13
3238

昭和十九年七月九日

奇傳新話二之卷

福喜福悪建部軍方為發跡

人間の榮衰福福ハ得る縄乃ガクク轉環毎端賢善乃

人妻福とほぬれど好悪の人間福と得るあり古今替

事あく人の善と候一悪と遊るの心あきひと人無轉

によふかのことまうれども舞子あまみ鑑まび天の自然善

祥一悪と舞子の能歴我としてたがらば道にふあ乃

轉變のよめに我播瓜先ざるの安富子あり今らむうと

あんねはる佐と本家の騎士に建部民が伊沢在司とら

若幼年とる竹馬乃友あく其子去飛雲に遊一度と

功もあつて且乃と好く移来正一かりね故子二家兄弟の

本山谷平

平松町

おろくあつと其吏り古人の妾ありや一藩にも是れ
稱せり其子一子あり民が子と軍をたふ力量あつて
心飽まで極く辨舌流るるごとく武郷に達せり伊は
一子の兵庫とよし生得過洞あり眉目蕭しく武藝を烈
く志す忠孝の志あり一家莫逆の吏りたれば軍を
兵庫も初年より同隊の勇るごとく実子骨肉の兄弟
るごとく民が病死して軍を其縁に是き官務に力
用ひたり庭日の思ふは失つて無聊やんばあまりに
懐向の情逼るといどもを妻の身にものざればはとめ
て後事と扱き暮りらふが子兵庫が学問と好むか
と其意にほりせて学ばせんと欲し其は園防園大内

家に学問をせし志園志あり其皆世学扱ふ事り学
司兵庫は僕として侍りて学ばせんとし兵庫は子悦と書後
兵家僕も背肩を身控にせり父母に暇を告げて縁途
に去り時ふありては友ありて軍を兵務ありて父母の命ふ
あつて防及游学の趣は諸り志をくく別は告は
小軍をたふ無異にして南ありんばあつて疾はも我子か
遊編もあつてさよふありて今出是の時ありて告あせり
本平生の交誼またぐりといひたれを兵庫あつて親
老兼く思惟しけふあや昨日に及て其と僕せり某語する
やのども是下と懸せしんをあつて昨日あ度生を兵庫
とつども初は屋形へ直りて其後いさりがたれ利の

行傳行古集

旨ありぬあり故は派あり書翰よとの意と速贈れ
今とあり談論せざるのよ先某を以てとらばとらば
曰下は此の他の中ありとらばとらば今や天下争闘
のるにまゝとらばとらば日夜務員の大なりと思ふ
里世耐すありてあまねるは学問の修め何のむぞや思
慮とほくたやと臆心と生じて臨場の勢業とくく
我を甚これ然と世故に先修備ありは強く次は我意
と競のそ無存一礼して知色乃苦言某を以て感佩せざる
おわだ四海去崩の時臨場乃業の尚耐足と共たはく
志をく功徳ありと屋敷の競文と許文せり只士族
にくま耐は血氣子ありて不義の行は臨る半古今

其例多し某苦道に志く國民と活るの徳は徳一和
く國家の補佐ありとあり兄又あり族むるかれ
軍を笑て只別強とそんで道は用ふあり士の上流
我宗の業むるにありて義不義の別あり只諸人の
よよ物ありは心とせむ英氣充滿して何等のゆもあ
ずくありあり是れ思ひ止く学問の徳は益なりと
は世耐自らも度は送りあり世論と笑入く軍を
と割一里下は於我子のむと故は將は里下のありむ
我競すはあり本老人の身ありても子万歡喜あり
ぞとれども里下の徳甚無業にして其の心とらば
おわだ古民は存生ありせん何ぞ其徳と是と

終るん凡そ其君子を以て其國の用と爲し只暴業を以て
力以て任とするにのむ日本の事性勇氣を以て
立り藩を以て加えたるは其子に忠孝を以て万民を
撫育する徳を以て之を困去平治の業に事せざるを君の服
膺と爲るに故に今將と爲り防刃を以て守りて是
下亦今は友の勇を以て母を以て古民を以て治すを
らば必將と爲り子に下と爲りて守りて是を以て
思ふ所の心より別と爲り亦其兄の勇を以て是を
くはんと親切に教導せしむるを軍を平服して亡くは
刻と爲り其子に以て其はく人何ぞを以て守りて是を
万道路を以て其業を以て守りて其を以て其業を以て

亦其子に以て其業を以て其業を以て其業を以て
喜んで念願を以て其業を以て其業を以て其業を以て
ゆりて其業を以て其業を以て其業を以て其業を以て
上子出かざるに学問長して道徳を以て屋形を以て其業を以て
に其業を以て其業を以て其業を以て其業を以て其業を以て
等に立るるを以て其業を以て其業を以て其業を以て其業を以て
と其業を以て其業を以て其業を以て其業を以て其業を以て
利其業を以て其業を以て其業を以て其業を以て其業を以て
り其業を以て其業を以て其業を以て其業を以て其業を以て
其業を以て其業を以て其業を以て其業を以て其業を以て
に其業を以て其業を以て其業を以て其業を以て其業を以て

其業を以て其業を以て其業を以て其業を以て其業を以て

其業を以て其業を以て其業を以て其業を以て其業を以て

其業を以て其業を以て其業を以て其業を以て其業を以て

謙し其意欲むくも媚とゆく随後ある小元より驕慢
 の大友者心碎しとてつまずき若年にして武藝に長し戦功も
 著しく且威儀辨舌花やうある英士屋敷の先途ふたぎさ
 量と沙汰のつて君も大切の者とあがりあひおくの賞
 差云のつて一五年の間は福成増し胆気をもめて一時一藩を称
 せしふ伊沢屋司の篤實の勇士軍を巧言令文以少く
 移すかのとおしくおとする夫親とあとも用ひおの
 ども古民知死に臨むとてあつて彼と我と托す何ぞ他人のお
 やくにさへんやとひそく小軍を成ゆんで當時是下君龍を
 了らぬり茲大友麻呂賞して若くは士を何れの榮福い
 上ありとるに是下のゆりりとるに己おと途にうり英

系は掩ひ隠し媚とせたり其應對偏倭ありたよふも
 是我をさくしつてひとよ人意に従ふおとあはれあま
 ば久しきとて其身に害成せざりぬまよく持れよ是我
 朝にわくは古民知死の心成りつとてひとよの朝とあて足
 下に告りのことと流くと教戒あてに軍を流し流して是
 わくびんが雅うかくのおとく親切の誅鞭とらるんやひと
 に亡く又再生とたるとぬま心を急ぎあはれ改むべしと
 満面ふ慍と罷りやられを屋司も喜んで定まり世々の
 てげ子あり民知死の決心とあ得て一藩の下に其心を
 改む正よ大友とつとるにべしとさぬくもそおられを軍
 ちもゆり謝して左ゆり掌と振く大よ笑ひ伊沢乃

老翁は人の發跡を妬みて立ちかき名張りて我とらんり
おとら落し入るとい愚人と年々おかばに其端は心服
の姿をのりてけがらうと誅せんと拂ひ除きせむるのそ
待已久く家へまさせぬとまより同氣相求る朋友に對
て伊沢の子孫を多くに悪口を言ひ己が徳めをるおとを
と轉倒して言語をて妬心のぶとく誂り誂らるる人
情のうつりやと死無くを月がけりて西にみん悟むりの
一同は笑てたるとありんと彼大官の家へ入るとも是れ親
出で黒白を引らぐと倍り笑まらうと一うはる目も皆
其心とありと人をも自勝んとぬひ免は是れ大官の役
事と罷りて平士とありぬを目とれと恨の心直末もあ

先子諱めらるる孤憤りて知て我妬心のりと誂り世流
言一藩ふ及て今かく後事と辨るる是れ我心とするおまの
らだ只軍ちが二生孤獨とら其人の面心よりあるとてど
も古民の子弟とくありては船全我教道すの山から
ざるにのりて志もあれども苗村の勢誂れ納るやと逆意坊
長せん暫黙せらるるにまぐたとまより困恥一室に在る軍書
に眼とさうと戸とせざる事数月に及ぶの耐を司や同
組の老士にまおまあり今や四月の天誓をせして一室にの
り暮し終るる家子病と求るにを一近日に流しおと後
船が候して彼等には魚をとりて一日の魚とてらんば
と足下にも同行のらんやと後今を居目も郊外の遊り

むらびとるふあれをたふ喜びと評議し其日に
て竹葉等羽着してけひやうり南國の江流美景天下
の奇觀あり騷人の賞譽するそ雅更一天雲なく日光清
朗として竹葉の真限りあく江をた總と敷せし四の漁師
手段とそして船をとり獲もまき園具碎とそして文
陽傾き倦鳥ゆり落暮月東山をそりて夜系む目
悦ぶめぬ活一第庵にまきて是は依るに世をさ
と好きて常に防はまなりわが店自が子兵庫とま之乃
学なありまき店子同業をの扱語りをも西省の傳
つゝ若く今も有るを西省もあらんうしはどく
時うらりれを店自心はまきそ同伴の就ま向うと者

海客まくるべし某の亭坊と用後わりの話より西家
念及子やまきりに各領掌として別と若亭坊子謝辞
ねまより亭坊と防は学換の極子大内家盤花の就
に談話しまき店が子同成就と悦び初更と死く
ぎてまき月にくうりて移ふ歩むた右松樹茂りて
まき店にそりて里を東の盗賊を面まのりまき
おきる下船は力に切殺せむ店自心得をりと
ぞ彼曲者と如き海客がけに切放しまき店後より
者おきまき店が店自が肩先五寸をり切込
ち力に拂ひまき店附入るまき店返す打倒し
勝るまき店意氣あつての狼藉る但強盗の
奇傳新話卷之二

どろりと青いとも昔ありきむらゝの胸の火引あせて振
のぞく間子下あり曲者指添は抜く横腹と突ぬせば流石の
左目世多に弱りかぐら火とのぎて刃れをほくく建た
軍あり己人畜親とひく死某に仇たはつりあり由と
つらせも立たえぬくして指込短刀一本より左目も心神
悩乱して反るあはれとらく抑え止めは指んとせしあは
りく人足多たれを軍あり慌て逃去せり馳来り人殺は左
司の内室一人唐室に殲るは竹のく志きりに胸裏を逆
かぐら若黨中間立一人あく馳付世のりさぬとらんく大子孫
さぬ抱して息合は刃刃もまごむ附く死垂り女房とるで
大子喜び悪逆するの建た軍を執神りと附くはは合

に及ぶりば首級を度にはくえ財を物く仇打ちとく一と
當時彼が勢君の寵愛する大長多くあま子存推し野子
仇手の形斬せば牌が刃の上危るべし一とく財物を何と
どろとひひあく舌もさく口くやの一言とひ世の
名残とあま子息ぬたれを女房も悲歎の涙せきあつた
取乱は身あり一が流石は左目が妻女は刃取車一所り去
とぬんで右の次第と云合め世地より斬るなり我又仲間の上
強めく上達せんと死骸と其俣にして立神りせり既に刃
方の斬くよらく検使より吟味の上左目が僕と切き
あは迎々にんあの人あむ左目と切殺しせり者は逆電
てり方あれど必定を強切あはだ近國の盜賊刺とらん



た先の業ありと詮義をら有り換使いさ有り言上
多た子誌自評議の上伊沢左目心をの士とたのりく
召りゆ不盗賊のふたにのあく切害にまよゆ油取至極か
アままたよんく家名断後の令下りて妻子に家賊終
り上い何方もえ退くやと邪の裁取子左目妻女も
兼く角のふんと覚悟かぐら意恨やふたぐ家賊引
拂ふ兵庫取者して道ゆく世ゆ法とせ多く息はごめ
ど馳身り母に對面一委細と安居きて切齒して怒を
天と極く直子建初とおとらんとらや駈おると母は
押止めて父の遺言と説きせ今怒りにまよてまを紀
狼藉者の汚名ととりておをばもまをせとらんば子共ん

大死ありととかさ口尻割きるに兵庫も道理子服
時高とゆまきうんと奴婢と集めて眠はたより近邑の家
民六角次官とある者氏系山くえ来左目と別悪ある故
は家に存りて母子一旦の安居とありまよりは六角次友々
士といども家富て智慧解りありゆま山く英士あり
左目り非業の死孤悲しと山く父の仇時高と待てはく
印局と紙遂さるるくと頼りく交合をり次なり嫡子の南
附堂上家に勤仕一人の娘の容儀絶羨なく近々これ
と慕ふ知事より兵庫と云號ありて双方の父母共子
安撫せりけ度の変らゆつて兵庫母子其縁と解るると
説といども次友史婦義引ありまをて娘探兵庫書と

成むんを生止るはゞき貞節ありありなれを親も
 詮方あり只其時と信居り一日を庫は迄の處をと訪
 ひて其夜七時の款結等と坐程このお語りにもも
 くれを度量ひてまゝに止めてる翁世居の物語に會
 落しあり居るのそい用ひてと要あれと款結あは
 兵庫もいあゝとく止宿せり夜更のままで支款一室
 並び麻乃が夜半さく一人の力士忍ひ入大なる鉄棒と
 おくあ人びあゝ横さぬに胸腹とさくうに打兵庫の腰
 とおまかぐら枕の力と揺く横さぬに彼曲女が胸切と
 死とんとすふに腰をたさる多念と力と杖ふあせやも
 あはれ身のおとくあはれ真坊とゆふに善あいんとも

すべうらだ天命西子はきて父子共にかゝ非業の死であん
 やと一心と治く其命にありたき術ありありさぬありを
 ああは六角次官兵庫が度室へ入りてゆらさんをもと共
 に大子燈と愁と字七八人其お難人と多く引候して
 室にあり庭にけけども音あ大者のぎそ伊沢兵庫
 庭やあゝとるるとゆらに兵庫次官と笑と大子燈ひ
 某室子をとくども身折かありた打破く灯火はんを
 のとつに扱てを憂ひのりと業の戸押破りて入るれ
 を亭坊の既子腹とお割裂れて死して久兵庫の腰とお
 まく骨推けてまゝのわらだ切殺せく曲るが冷條すれ
 ども志れど御く次官が僕の中にるあわつく伊勢路の

盗賊の張む松坂九島といふ古今の太力ありけしむ乃終
捧にのこるを鉄壁も推けごとくしむのめし庫君死す及
をさるのこめた一かに彼と切殺しあふのこす好の勇士あり
や言ひ巻らるを次友も無庫り死に及びざると喜びく兵
庫とあ抱し二人の死骸も取おせ其夜子孫家に引とり
僕一人と矯して皆をく去るわごとく何く産室ふたと
くして其僕ともゆとりめたり裏運の時といふとも義者乃
初のおとく災禍に罹り榮運といふともも義の凶者
寵不誇し喜の伴に善者と殺し或は傷て我喜ひ因
中に善者天乃善悪應報の教りといふありは呼ば
しむぞ

禍悪福善伊澤兵庫田家運

天地に名測の運のり凶禍の運にのり時ハ勇夫も英氣を
折さ縮者も才と昏迷人懐り免れがされたりとい
角次なり智量のあり兵庫並に二人の死骸を引とり
家人死くく口どれんとて産室に密に厚く葬り家士の
内勇智あり夫友人死擣て金銀と多く持せ伊澤田の
盗賊の窠窟に到りめて利害と競らせぬ庫り腰骨ハ
療せんとむとらん活中の良醫と招く其程子死んせり
むるに骨あらぐく推動して活方のせらばなりとい
ふに母も太刀力死落し娘標ハ紅粉ともとの今日夜何
ともあれど大精を死死して早朝とらん垢離死く死途子

伊勢大社神宮公孫して兵庫が病全愈公新撰云一身
 ちまた代らるるに新公其精誠實に修むる方なり次
 後しく思ふに腰骨折傷して療養公公常に優て
 公公多し諸醫の論乃ぶくハ腰下血多く脈略づく
 なるに志るに肉色帯の如くむ氣力よく食事をむ
 必不活の志子の如く強ふ瘡治せば安定治るなりと
 思ふ一且思ふに建初軍兵庫公母とて人なれだ
 切害せんとな久しく室に幽むるなりと伊勢肉交の神
 公何某親族の縁のつて潔白正路の性質あれば密
 にとり送らるるに母も療養せしめんと母子に語るに
 兵庫涙と流し思人の慈悲慈悲死にても母はむすぶ

今一某不仁の人とありて大層も害せだんこの骨
 けて慍慍に生るに思人の命肯くなくは万
 事宜しく希ふあり母某天皇皇孫信敬とるるに
 年學校に在るも一歳一度必系孫に齒年世榮子附く
 其母の志るに交地子とて人骨髓の類をあり
 還謝とてとと落涙して迷るを母も子方の慈悲と
 謝してひそかに夜來駕に乘りてこれを送る娘探額に
 後ひめて抱擁のな形をあれも次女世間と憐れ許
 さだこれより操別子於刑をりて是子神道に委
 る智徳の老女のつく老若其徳と慕り操世老婦に後
 ぐる志願の旨所州其示教とありんまを希むに次

笑く汝が胸中其えにたぐらる我知る彼神道の智識
あれを老婦子後ひ教へて其の甚うと許容とふれ
た子悦びて老婢一人と召連て彼老婦が家たれり
身一昼夜子其の教へてりは時建勢軍たれり
伊沢み子其の教へてりは屋形の氏族依と本彈正とる
悪の人兼て叛逆の企ありて人子取て悪
本後堂一人とあり忠臣派退き備奸派進む時と伺
がふの謀討他事ありて大藩人は之にかた執中
依と本監物彈正が企建勢が凶悪派格と内々忠義の
英士派招て國害を除くの討伐とて密に角次を
が智量ありて心儀とて人物とて入總

あれをい度の評議國家のたまあれを疎畧にまて
危うく智量の人と諺論して脈と圓にまてと次
招き密に入て國家のたまと諺に次を辞するふ
大義の段と諺無し其序に伊沢庄司が接死を
折傷定建勢軍たが不為ありと新に監物もた
駭く兼て去まもあんとていひたふが下下の諺は
て其奸謀明きとていひたふが下下の諺は
後中教多かん我は賊と捕へて兵庫が懐とせ
むと密に教別にして次官も喜び取りをれり
に軍ち兵庫が次官が家にあるとて出でて彈正を相
諺し急に兵隊と命とて士卒引俱さる次官が家

にさして屋敷命あり伊沢之庫は家臣に在りし一給
 のと下あれを早と渡すと一と言りたれを水取立思
 ひまらざるに公命伊沢庄司の兼と懇意にありたれも
 彼水取の死と遂に後妻子の半一向なせだ何人の
 言や世家前後に口あつて外に固堅固あり屋敷
 嚴令あり名を悪く搜して吟味あるとよみ武
 も其後あり向りかた子幸ありと前後の虎口は幸
 て固め訪下知して家内と尋ひまむらに奥帳内
 婢女の住居あり向り次官ぶらうも引くんせ
 に一念の怪さるりかたれを武取も疑念と晴一
 と亦屋敷と尋ひ某等が後本に願目あり居るは

が一宮親りむらうの海とに篤実の賢士ありと麻衣賞
 て立向の軍方の倉庫と得と密子切害せんと欲
 に武取身と空ふして立向りたれを中とりね本ありと
 さあぐに思ありと想得をりえ本次君が娘探の
 國一の美人の伴あり若て倉庫と云あぐきありは
 によろめ定固ひ思と一と思ひに次君思あり
 知へ後して養ひ思もあるべうだあうだ彼娘と
 多く書とせはよのづりう動靜とあるべうと多兵
 とかすひ次官が方さう一とく伊沢庄司の亡父民
 兄の交りわりて父殺してまも我も庄司と父と
 庄司も亦我と子とあたあうらに先をてる思の横

死すよりして其家断絶を其父母にあらざるの悲傷
あつて何卒一子兵庫改易の歎書あつて新ありと
いふもいふあり難口や屋形甚憎ませのひて其母は
これぞ其の悲歎おれどもあつては又伊沢と交
りわけて息女とめく兵庫と妻合するの物諸某もよ
くあるふあり今兵庫上の処あつて其うへは
米をさざる所の某之庫にありかりて息女と妻と
交りて存くして伊沢が借養にもあつたや入るす
海河流さ山がかりて述せりらに謀者辨とつる
て始末はぬびしうに達らるに次官かふきつて建
部氏の厚意子方感心して實に放人の凡わり醜

娘室よりあえんる感謝したえだ命のおとく兵庫今
屋形の勘氣とあがり難散とれを娘との縁の自後をり
建部氏お嫁する所の猶之庫に嫁せしむるに同ト某夫
婦が喜び後ふありいんせん娘探兵庫改易の後
難後のおつふあつとさつて數月以前家別と行方
志まじく先尼子あつて遁世なり十日の間に兼
てて夫婦力と落し後悔あせどもうくはむとむび禪
房にのり者再修よりうくはむとむび禪
佛をせりあつても女の自心す告びむくはむとむ
命に志すふ身あつたとみ眼子涙とくくきんる家
に場も潜然として其心察知して立所の軍をに告

けまびた子物まゝに死なむとていづくの伊勢津の盜賊松坂九
 郎が手下の者共を命じて見合はせしに兵庫と切殺して
 後の慈悲断座と其の恨とぞあまのりたりとこそしも
 云庫親子の鶴本が室へ入り次官が密書と出し始末と
 詰りに鶴本が子駭ひとさるる親子と深室子伴ひ初
 家内が戒めて客人ある事と唱へる静に次官が紙
 面と讀みて是より親子といふあり兵庫が 天照皇志
 信らありいと感して神祕と信じて日々に真跡あり心
 毎に鶴本が妻と志すべく結んで縫裁の旁に代と心母ら
 けまびた月日と送りたりかに鶴本醫師と終極く其出
 石正一 貞室と撰とてこそは癒治かしては度く

醫と求るといへどつらう 兵庫が事嘉元せんりと慮て
 去らうに財はつん念せらふ故腰骨自若として疼ざり
 されば兵庫ひそかに鶴本が對して父非業の死を慮し
 世身もかくのぶとく不仁の人とあり候て天と戴うごま
 の仇目おにあらうと打る計りだあまのりたり仇人のこと
 に世身も名臭とあり天令神命に放きけるふか明を
 こそなまよつて六角氏の泰山の恩とあひ今又其恩の
 養保子あづかりて親子久しく慈悲を生かす命を今た
 かくのまゝと偶然として存命めとも神恵もなげな
 らんぞとぞよく自殺して天令と候へしよのうの大恩
 先母一人のりとも恩書とい紙ふと涙をぐらにのべ

まんを鶴木大子創しては心とありたぐり神命を
 是下れ生命既ぬんとおふびうんぞわくひごとくあぐ
 志めんやかあぐた時わくくつこ疼れ難とま下一
 一悪業とあぐ果子志めん命あぐば収くまぐしてその
 時或まろを次宿某が寸志と感るとあぐ一日もけ
 があぐ療者して何ら死人とたり仇復報とあぐ
 ひとまぐ婦人女子れぶと自殺して天命に及せんと
 まその心づぐまよりゆりやよう思量あぐたまきりあり
 也一言の教示も兵庫羞のさあぐらぶと頓首恭伏
 て全身をまほりせだ悔意うごひて神明に及せんと
 教言によつて悔愧生れ背問汗とあぐは亦来恩念

志とぐらつて書讀み心とまぐと安撫としてのべき
 に鶴木大子喜ひて其意悟まらる即神秘乃有ぐ
 此而あり候と信を授むりあぐれと伴ひ入るんとせ
 如上人の老翁忽然として出あり兩人志をぐとみ
 に鶴木駭ひくとま其心んれを及為あぐ白髮報のど
 とくあぐく伸びく肩子かり眼先人と射る鶴木を
 悟して何人あれを案内もあぐ人家に押て入あるや元
 翁笑て我腹中に神明の告あぐ世家の病人及癒
 せんためにありまろ是下神機として神使とあらむ
 あやむだぐといふ鶴木その凡庸あぐるが悟つて
 慎て某郎あつて神使とあらむあぐ五れのを業

先生有恙あつて我家の病人を救ひのたまはる御恩
てふは我任あり平癒と銘するありれとほのま子伴
深室子への兵庫が振ふととくせんとく神買の燈のふ
と宜ありそ母の英雄あり我をわめて其痛と全治と
る今日より七日の夜とあり八日にてりて瘰癧加んや
連子其家の社檀まむらとくそや神祝の巖石と始む
親子亦信を肝膽まひだく側にあつておまは守る其
お子のとく鶴を先をぬまむらとて今宵は休息ありと
食糧ととて又明日の夜ありむらんとておまは守る其
ゆらと中飯食あり昼夜休むむらとておまは守る其
中休く痛く又明朝尾後ありとておまは守る其

にまらせ其異人ありまるとして自勝とて側子度せ
伊沢母子竹ぞ休食せん其後ありてその信ははら
かたどくとありとあり六日お夜七日の夜にりておまは
て願く鶴を氏其職よしとておまは丹誠とありて
神職中れ賢才たり伊沢氏親子の信を精誠竹ぞ神
感ふらんや明日の病瘥とて昔にゆき一且只今け家
にあり女子あり貞烈賢性あり星下おまはとて安ん
あまむら一其女子と伴ひあるおまは是神使あり
神意ありとておまはとておまはとておまはとて
おまはとておまはとて一人のおまはとておまはとて
おまはとておまはとておまはとておまはとて

神傳新活卷之二

十九

若の若あど一と自立せし見るに一人の老女面皤白
髪深室の老女は彷彿としてむさおある一女子その齡
十七八歳にして紅彩をかざりて衣裳を陳野ゆれども
嬋娟なる容貌鳩をそふ風姿只神仙乃人間より
そふに似たり鶴本並にたちよつて一宿竹より容易
ありたて竹月ありとも遠田ゆきゆりさるべしとのま
あ女降伏して恩と謝しこれに鶴本伴て深室まの
に兵庫母子よりこそ女子懸懸して出身の次第の息
女操子あしどやとよの操へお氣のおとく母を我ま
りとわたりすがらと涙なるる雨のおとくさづりし出
ふああさうりりあひしるを父母よりさく神道

智得の老女のうと隠身一日夜丹誠をけくして衆
ひくく夫系の物傷ま代りんと祈誓系一今朝旅難
かく時子及びて世老女ありあひ神勅あつてはと伴ひ
妻子對面あさしむあやあるさづりし愛孫のおとくあ
ゆむともあく初ともあやうだばあ子あま母上まあ
見えなる津冥乃加護ありがく勿神をいと請りたる
に母子慈喜ありはる老女子向ひあく恩返謝され
を微笑して點既あは其時老女ぬらゆらさあがりて
時節到来神冥告人子應あるに就竹ぞ明日とゆんや
服紗子包するお父あま兵庫と伏さめ腰道とさるる
七八教身あるり如一打さづりし其あはさく二打腰下れ

我身ありて母をえ四五歩に及びて腰屈伸素のこ
とく七八歩後を全神一同して衆居むりれどく一不
乃煩うし死不致きれを我とさうり九孫とて神威五勝に
徹し久病頓子疼く平生に異あるりあり一即之に充
義神秘乃嚴約子よふ竹の幸りあらんとは修治素
伏に系に母も操も感涙せよあは伏強むりりやう訓
お一鶴は太子贖賞して神明擁護告に祥一悪死懲た
乃難難をだうくんとくも老翁の嚴約実子神明の内
難よとく死不側の異端とるる神職の冥加は上おくと
瀟灑して歎喜あせら老翁曰わくはどく善人集つてかく
乃ごとく困厄の間あて伝心意くは竹を感應あきと

わん兵庫へのとぎ決意ががく馳けはるると告あせせ
りし死に江忍んた起つと大守れ方に毒殺の患ありた
西之日と怪らやもは服紗おぬく身祈と極とるとん
毒氣をくくは復疑ひか一決意あわえんば彼よくやうは
かろく今今いそとありと側乃老女と侍つて檀上まとい
登まとい息一陣の清風起つて形は消えとく冥あに青白
の幣帛二枚を右子まとい翫たり鶴木初親子又婦
ぬとに神威あたらとる心肝は海りて仰と見えま
わらだ鶴木漸くおほきとく兵庫と從して決意ががく
つとぐりあ妻婦人の我あつりて氣はくひぬとつとま
まは兵庫の全身金銀のおとくむりたりつとあひま

糸ト其俣子とせ終らけ時江乃屋形子依本彈正
が及逆増長して建武軍方も御とと大身とわう逆謀
をぞんらゆあつ今日彈正が邸へ屋形請待かす
やて新子高殿と造立し其社嚴珠玉とらりげめ花美
死にくして茲役人列とてか其本駕とまら其別限に
及びて屋形行列侍置と飾りて渡河ありきんハ彈正
遠に運くをり先立とて書院子請ト儀式乃食膳と
嚴重にして夕終子及びて奥殿子後しあそむ多く其美
人と多くして青世とゆく奥殿信屋形も沈辟乃之
多と美人の中に河目子と南のあつて側ちくめされ
裁譲乃同酒盃と改めて名酒と献じ屋形行の心かく盡

ととりのみ子致する美人のまはれとむるに河腰の珊瑚
珠忽發して推け死するに屋形河公はさして盃と下
にさるるをえらうく見合せのみに美人等たむむに
せて河側子よりく盃取とらるるあつて河子よん家
そと一吸喉に海ると忽に神腦乱わつて面上は雲を
孤わらへしとの候ととに倒さのひりく美人等と
わけて上の河氣及次の外ありとわたりたれを彈正欠
はまて抱き起しなる所依本監物河連人張る
連くありしがかくと固よりをせはさて河側子よ
り指折ととらくやんく怒り腐り彈正は河側とを
急わらへし毒家とらんおれを奥殿の身乃う入



だきまきありと押のまきと懐中より一つの服紗袖あり
かして胸より服へりもそとまづはれ押さるに一回りして
惣屋形の面笑まり氣力平生ぶとくに起まり弾心と
途と眼もゆ違緘女系に命して我子毒酒とをむとの
罷のぐるふらぐらんとありに弾心奉伏して己ら志と陳見
とすふと監物を片目くらをせとらに菱泥お即只一刀
に弾心が首と打落し監物との候君成扈從してたら
知らに八九人の力士左右と守護して玄園へおりに弾心
が家人其威と名きて又向ふ去かへ馬子馬子業トの之
を供奉列ととらくく改館ありきるえ東監物六南流左
等と兼くも殿ととらめ忠義の士とありめて危急の

変にともく五且伊沢が次友まて持来る神人授與乃
服袖物と懐中へ今日弾心が招待時節到来ととらる
かけ一故主君乃危難ととらひあがり屋形子の改館お
つゝ弾心が悪逆をうめて悟りのあひ監物が忠義成威
賞ありて其候討ちと見報し弾心が邸ととらゆきて
一族と強らば打たつとと一藩逆徒よりとらる老厚為と
礼ありつとと罪討しうすれと俸し忠義の士と一同に慶
賞ありてつけて伊沢兵庫が忠誠神慮を叶ふと稱せ
らる仇敵速討軍ととむる候子打捨ぐと命下りりか
に軍をい逆謀を強忍死守して軍に逆電して仍米形
アうら屋形子怒りのあひ弾心が逆包も其が軍をが

奇傳新活卷之二
七四

さく免子よれり去とらうぐらても尋ひ知極刑子行ふ
度しとありたり時伊沢兵庫勝軍を討ふ某れ
命トあり不日に打とり中なる辰お彩ひたりに彩ひ
の海り今と暮りつそま六角次官と競どて士卒百人
づらりと引候して伊勢路の盗賊乃屯之押あせたり
建勢軍ち江列と適まつく松坂九郎が屯へんを入九郎
が中下れ某れ我者我子にほきてたえ江列の捕
ふありともせうあかんと安居して嬉酒よあひりて
菅一居より一日伊沢兵庫士卒と率して門より入り
建勢軍ち江列依る某家より率りてあわらて伊沢
兵庫ありたり立物く對面あつてと迷われ軍を

大子悦び去庫の我公版の病ありけり人数とあふ
せりありくと来まつて運乃屋ありと盗人某れ
信りぐに依る某と喬友乃兵庫思ひたり某訪歡喜
にほえん某あつて入われといふ去庫をぐくとた
入屋形ゆき命あり逆謀とひく弾心とよき免事已子
免子乃ふ某に屋形の武運同物及逆佐某率夷せ
某逆謀乃某なたるによる某とて石捕りむ
某悟せよとあつて下より捕をせりくとせり巻
たり大膽不敵乃軍ちかしくといひ江列とら
やうして大下に旗とまんとて某大鵬の某女おど
とれ某雀乃子に合んやとて力押取と去庫死るん

舟車所古長

て腕とくく一搦子とたどて汝行乃識量あつて
かのおとくれ大言と吐や己が非義とくつりて大恩
乃我父とつりり殺一又はふ乃盜賊とたのこて我
に傷く其う人子逆意とくつて一屋と騒がた天のせ
めれまぬるざる不具今つ押りひるまこと懐中より尺笏の
鉄杖と出して軍を腰と連打するま七八教若く呼ぶ
腰骨多く折ましく苦痛顛倒して死とあけて多中の
賊と呼ぶ子一同は等て松坂九郎横死乃後六角次官乃
義憐義氣に感して吾輩皆屋敷の卒と知り汝死
せざるあせんよめればとてらにたむらとか一汝がさ
たふれよつろつろつて心服乃袖子見せ足とはか

ひく六角氏一匠をせり 齋悪多くあつりて天のせめ
とぞたつてつかつとを瓜んくつりぬれや同音に呼り
きれを軍をますをれ意外に物と魂天外子とび啼
泣して止まは兵庫かしくと笑ひ逆とけり心志との
事竊とる時其甚まぐ二物子れおつや高子小
にりり一人救とむさひきたらつり其旨とつり
たえり神速乃切と屋敷甚感賞あつて軍を死兵
庫に終りり監物改事張はくことり六角次友伴は兵
大地と終りり監物と補て園内よく治りたるは兵庫の
武運つれにむも軍を張引あそ母と其子そ張
うつくお懐と達しあつためて操と婚姻して名実

と一國子ありりせり人さうんありとたのあをうくこち
勝がぶとくあまども大さな海ゆき其終りそんれい
悪乃應報打に々々くがたうく軍ち大誅と善のま
ハ天恩に浴凡善悪乃能人々豈物とれざらんや

奇傳新話卷之二終

